

表2—14 主要大型横穴式石室墳一覽

古墳名称	所在地	石室全長(単位.m)	推定被葬者
見瀬丸山古墳	奈良県橿原市	28.4 (国内最大)	欽明天皇・堅塩媛
石舞台古墳	奈良県明日香村	19.08	蘇我馬子
藤ノ木古墳	奈良県斑鳩町	14.5	小姉君(聖徳太子の祖母)、茨城・葛城・泥部穴穂部皇子(小姉君の子)
牧野古墳	奈良県広陵町	17.2	押坂彦人大兄皇子
宮地嶽古墳	福岡県福津市	22 (九州最大)	胸形君徳善(天武天皇の妃、尼子姫の父)

ける痕跡といえる。

玄室内には土師器灯皿片の他、碁石大から小指大の表面が平滑な石が散見でき、石棺内にも確認できる。石棺前面に安置されている手水鉢状の石造物の表面には「一石一遍題目 一万遍 奉法楽 施主 菅檢校家 小倉諸頭道延宝七己 未三月吉日」とあり、大正時代に発表された梅原末治の報告によれば石棺内にまだ一字一石経が充満していたことが確認されているから、石棺を含む玄室全体が江戸時代には一字一石経塚として用いられたことが推測できる。また玄室内から熙寧元寶(一〇六八年発行開始・北宋銭)や十一・二世紀頃の白磁片が出土し、開口時期特定の参考資料といえる。

なお、昭和五十年二月、石室内に装飾があると報道されたことがあるが、現在では確認することができな

い。

石室構造を橘塚古墳と比較してみると、橘塚は羨道入口が顕著にハの字形に開き、主軸は入口から玄室奥壁にかけやや東側に振り、玄室は前室の天井の高さに比べ若干高く、側壁は三段積みで玄室平面プランは長方形を呈する。これに対して綾塚古墳は羨道入り口が若干ハの字形に開く程度で、主軸は入口から玄室奥壁まで直線的な形を呈する。玄室は前室の天井の高さとほぼ同じ高さに造られ、側壁は二段積みで、玄室平面プランはほぼ正方形となる。これらの比較から綾塚古墳は橘塚古墳に後出し、その築造年代は七世紀初頭ごろに位置付けられる。

橘塚・綾塚古墳の横穴式石室の規模を国内の大規模石室墳と比較してみると、表2—14のようになる。この表から橘塚・綾塚古墳の石室は、ヤマト政権中枢の人々の墓所と推定される古墳に匹敵する規模である事が分かる。

以前は鬱蒼とした森であった墳丘は、平成十六年(二〇〇四)十二月に伐採を行った結果、明治四年の古絵図に描かれているように墳丘の形が明確に確認できるようになり、往時を偲ばせる。

八 勝山古墳群

勝山神社が位置する丘陵上には低墳丘の古墳が数基目視できているが、ここで報告する古墳群はその南東裾に位置する。神社鳥

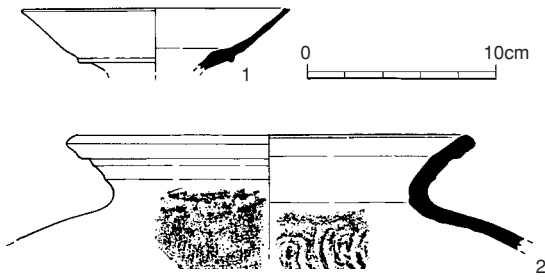


図2—142 勝山古墳群1号墳表採遺物実測図 (1/4)

居のすぐ西に大破して石室が露出した古墳が一基あり、その東の住宅裏手に三基の古墳がほぼ南北方向に並んでいる。古墳群はいずれも西側に大規模な周溝を掘削して山塊から切り離されるが、更に周溝を利用して深い排水溝が新しく掘削されている。東から一〜三号墳として報告する。定村は五基の古墳を報告するが、現状では四基が確認できる。

一号墳

墳 丘 南側が一部削られるが、比較的良好に残存する。現状で直径一八^尺であるが、北から東にかけての裾部が削られていることから若干大きくなるかも知れない。排水溝の西側は地形が乱れるが、周溝を再掘削したものである。

主体部 羨道最前面の天井石が落ちて、全体を図化できないが、全長が一^尺余りを測る複室構造の横穴式石室である。玄室は中央付近で長さ三・八^尺、幅二・八^尺、高さ三・一^尺余となる。床面には敷石と思われる数十^枚大の石材が散乱し、框石も見えることからほぼ床面が露出しているとしてよい。奥壁は高さ

二・五^尺の巨石を立て、左右両側壁は一・八〜二^尺の巨石二枚が使用される。前室も規模が大きく、長さ二・五^尺、幅二・六^尺のほぼ正方形となり、高さは二・二^尺を測る。なお、この石室では目地に詰めた土（粘土？）が部分的に残っていた。

出土遺物 墓道北壁で須恵器臑を、墳丘南側の削られた付近で同甕を採集した。臑は小片、甕は口縁部を肥厚させて断面長方形とし、細部の作りは甘い。

二号墳

墳 丘 東側が土取りによって大きく改変されるが、現状で南北長二〇^尺、東西長一六^尺ほどとなる。ただ、良好に残存する南側を参考にして、石室を中心とすれば径二〇^尺に復元できる。北西側の周溝は最大で六^尺ほどの幅をもつようである。

主体部 羨道部前面が全体に東へずって、左側壁が迫り出し、一見片袖の三室構造に見える。奥壁腰石が主軸に対して斜めになるが、中軸線で測ると全長は九・八^尺となる。玄室は長さ約三・二^尺、幅二・三^尺、高さ二・七^尺ほどとなるが、床面は埋没している。腰石をはじめ、使用された石材は全体に一号墳に比べて小振りで、積み上げ方も雑な印象を受ける。また、奥壁の両隅は石材を斜めに架け渡している。前室は長さ約二^尺、幅約一・九^尺、高さ二・二^尺の規模となる。左右の腰石は一号墳と異なって二枚で構成され、天井も二枚が架構

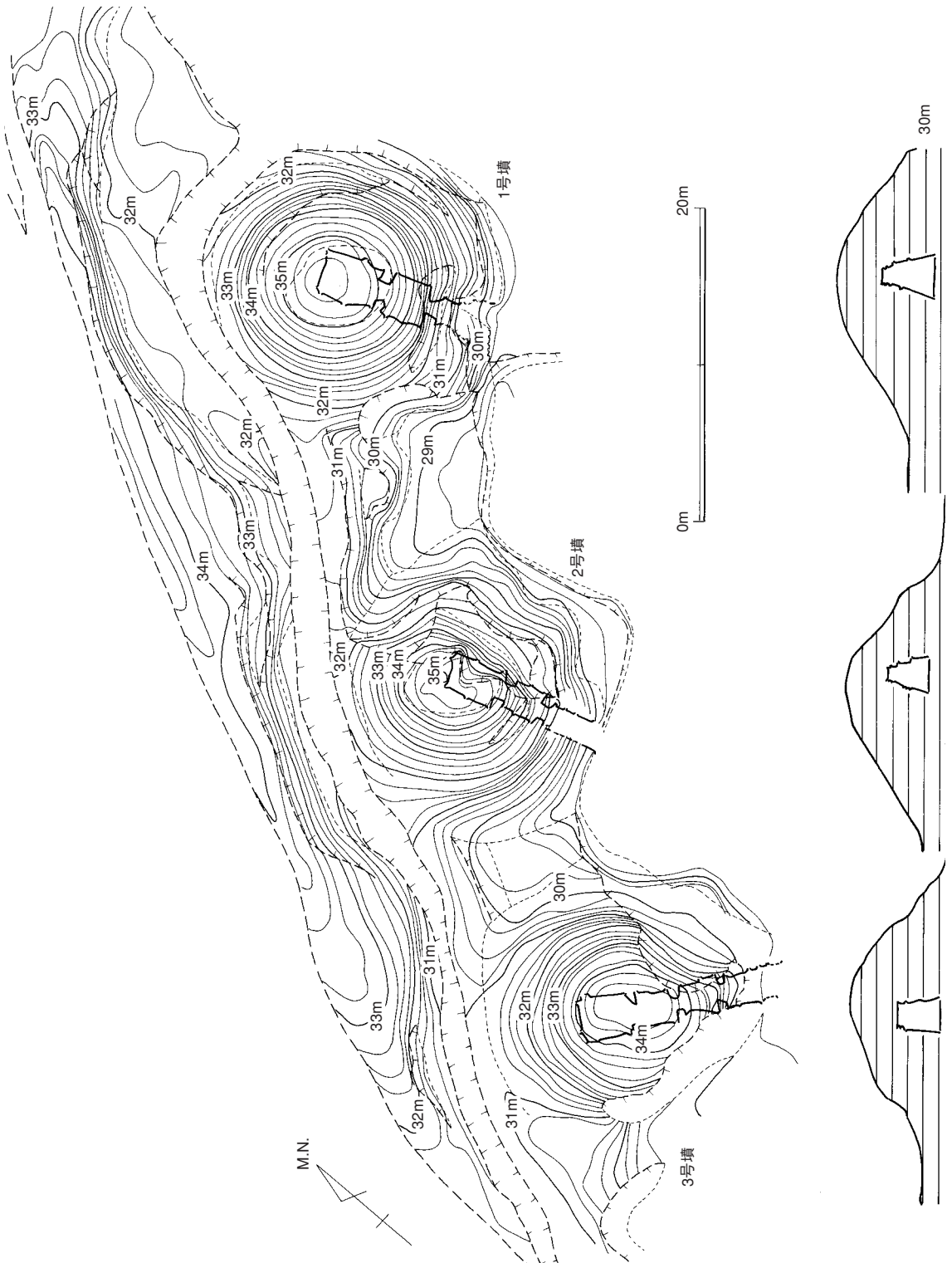


図 2—143 勝山古墳群墳丘測量図 (1/400)

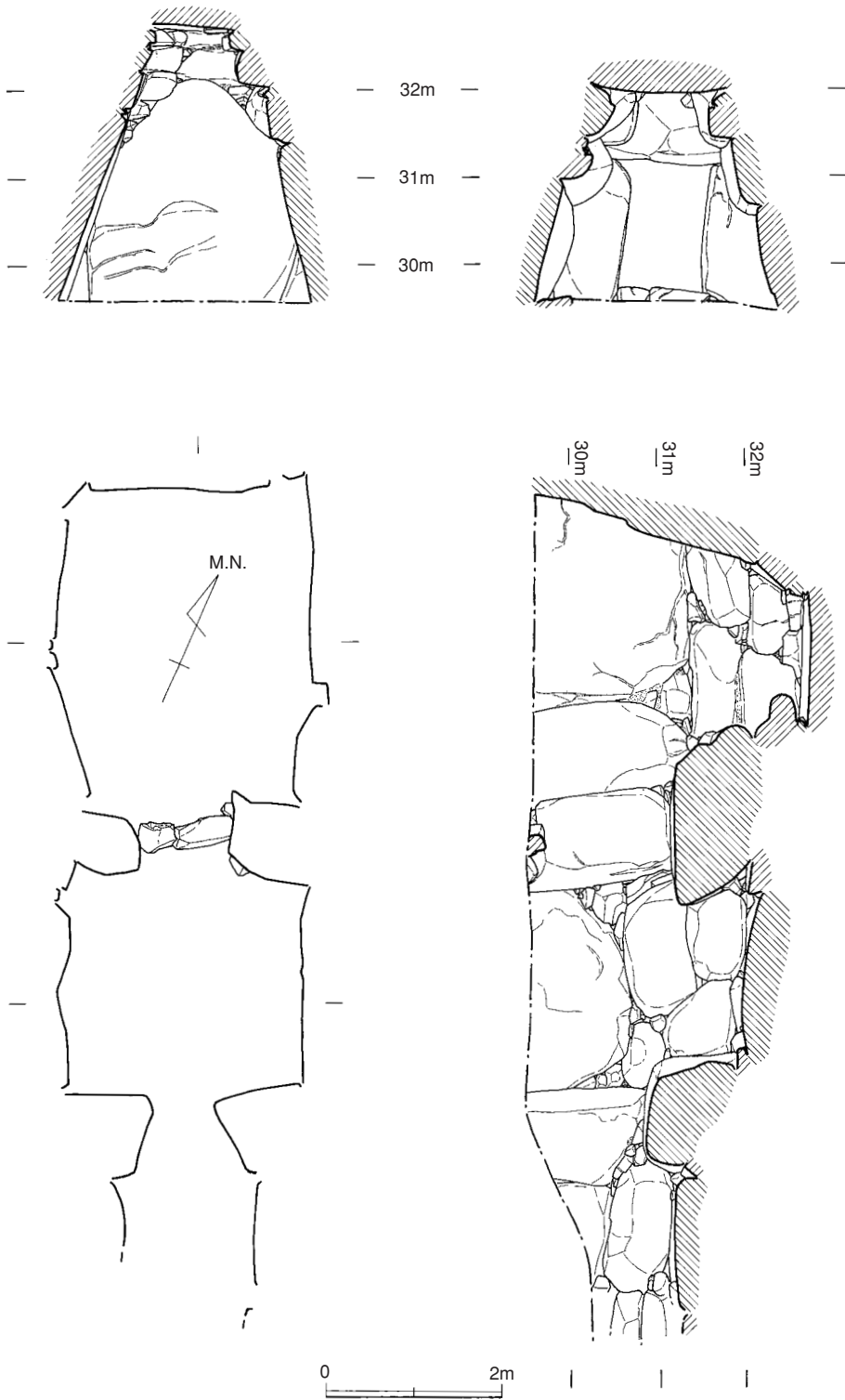


图2—144 勝山古墳群1号墳主体部実測図(1/80)

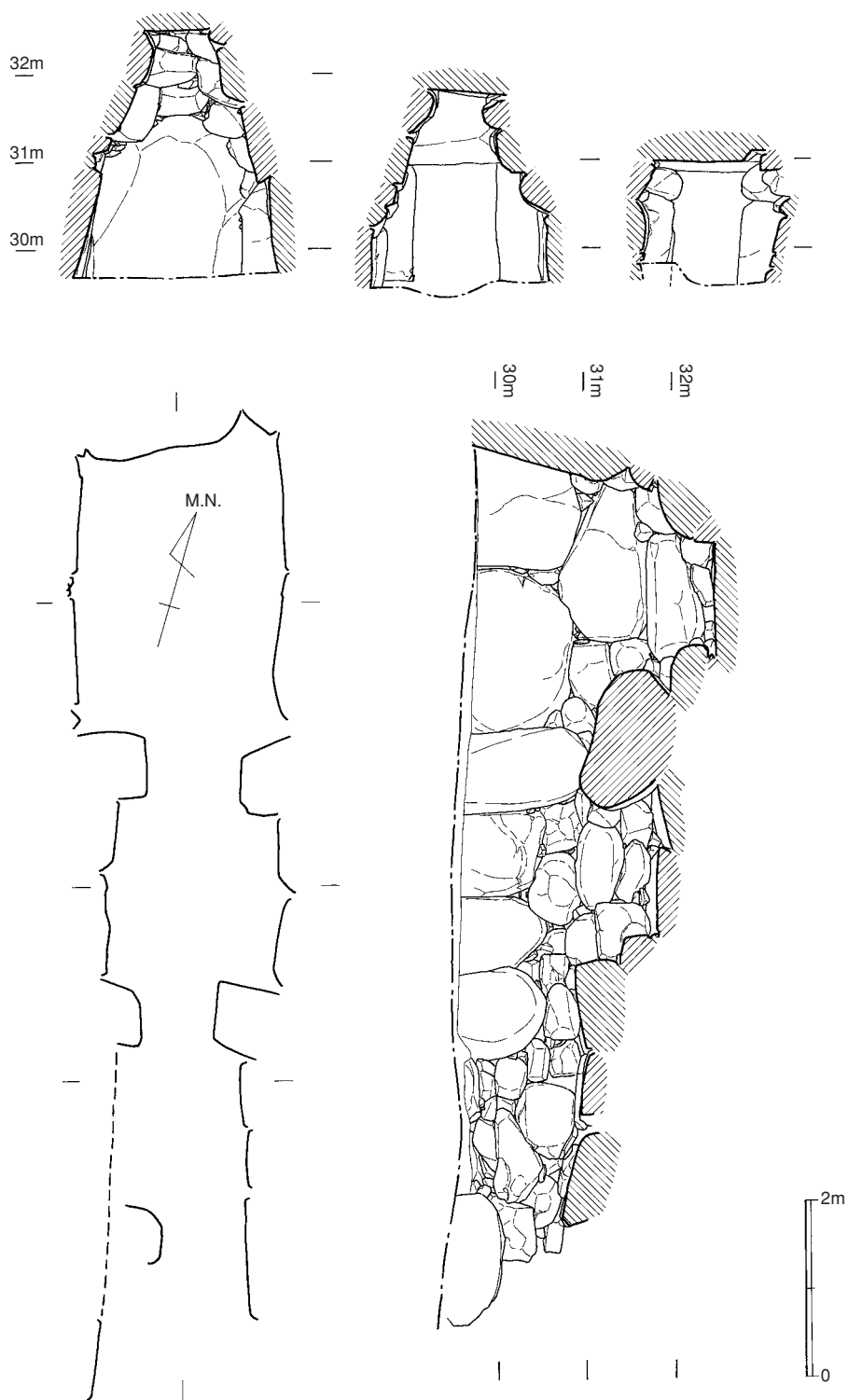


图2—145 勝山古墳群2号墳主体部実測図(1/80)

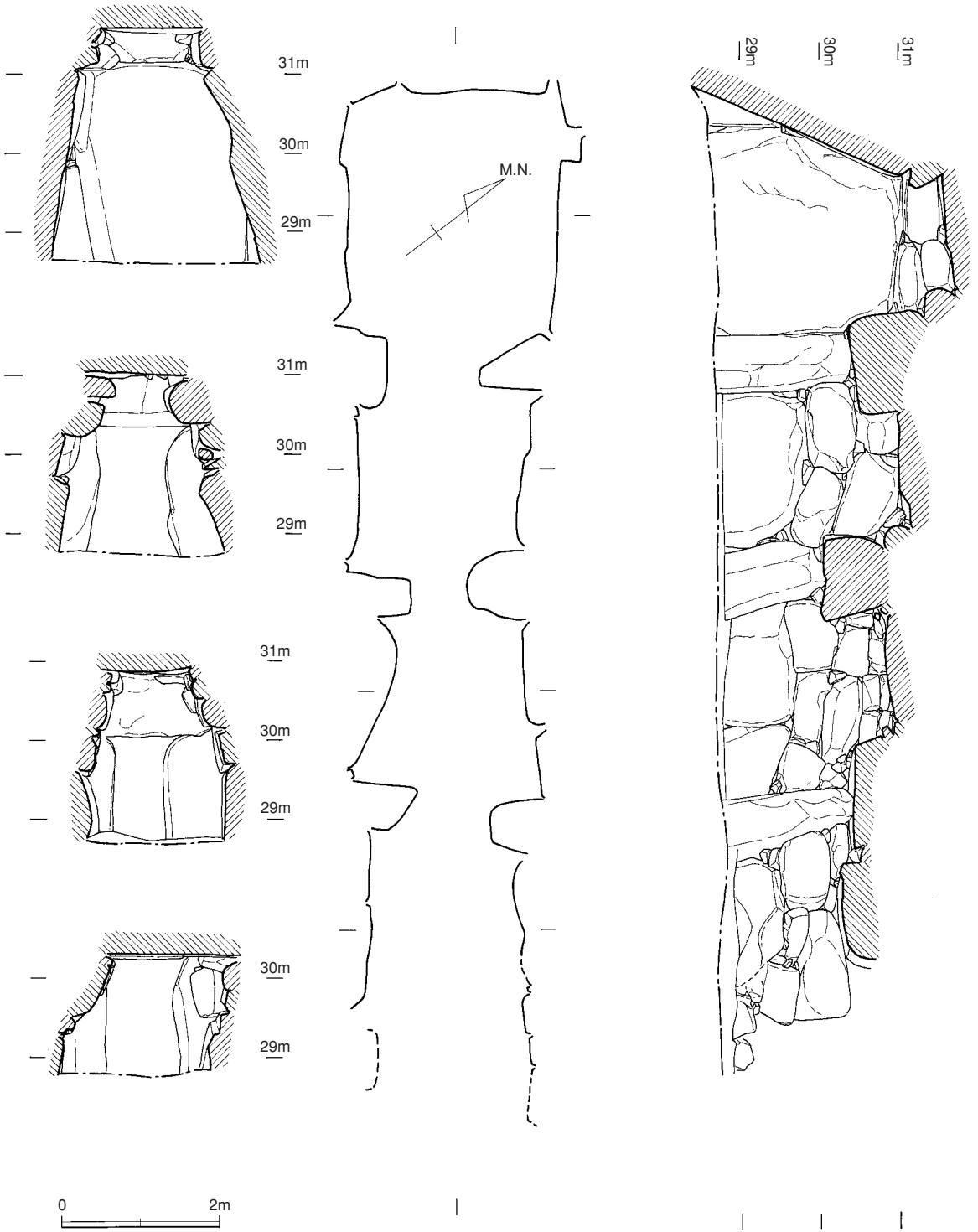


图2—146 勝山古墳群3号墳主体部実測図 (1/80)

される。羨道部は比較的小型の石材を積み上げるが、そのために大きく東へ押されたのであろう。本来の幅は確認できない。

三号墳

墳 丘 石室入口の両側で大きく土取りがなされている。石室最前部の石材が埋もれて詳細を確認できないが、北西の墳裾から石室最前面の規模を測ると約一九^ノとなる。これも排水溝北西側に最大幅五^ノほどの周溝の痕跡が見える。

主体部 三室構造となる横穴式石室であり、一・二号墳と主軸が異なる。長さ一二・三^ノまで確認できるが、なお左右に石材が埋没している。玄室は長さ三^ノ、幅二・六^ノ、高さ二・九^ノほどの規模となるが、これも床面は埋没している。腰石に使用する石材は最も大きく、奥壁のそれは高さが二・八^ノを超え、両側壁もほぼ一枚石で幅二・六^ノ、高さ二・四^ノ以上の巨大なものである。また、ここでは奥壁と左右両側壁の腰石の高さが揃えられている。中室は長さ約二^ノ、幅二^ノ、高さ二・二^ノを測る。腰石は左右ともに一枚で、その上に二段を積みむ点では一号墳に似る。前室は長さ約二・二^ノ、幅は乱れるが二^ノ前後、高さは三室の中で最も低く約二^ノとなる。石材も玄室、中室、前室の順に小型化している。

以上の三基は、石材の大きさや積み方に注目すれば二号墳↓一号墳↓三号墳の順に築造されたことが推測される。三号墳は同じ理由から橘塚古墳と綾塚古墳の間に位置付けられようか。

九 上田出土仿製四獣鏡

昭和三十二〜三十三年（一九五七〜五八）ごろ、大字上田大分八幡神社付近で古門誠一ほかがブドウ畑造成に際して発見したもので、直径四^ノ、高さ〇・七^ノほどの円墳から粘土とともに出土したと伝えるが、現在は位置を確認できない。

直径一〇・一^ノ、鈕の部分の厚さ〇・九^ノを測る完形鏡である。無文の斜縁、二条の鋸歯文帯、櫛歯文帯、そして内区に走獸四頭を浮き彫りにする。鈕孔はちょうど走獸の頭部に開けられていて、円座乳・文様の配置は正確である。走獸は長胴で、首が後ろ向きに長く立ち上がり、くちばしも含めて鳥首状となる。四体ともほぼ同じ図案となる。

文様はとも明瞭に鑄出されていて、配置も整然とする、優品といってもよいものである。遺存状態も良好。

古墳時代前期後半に属するもので



写真2-25 上田出土仿製鏡
(個人蔵)